

日本とカナダの教科書にみる文化的意味の変遷

——一九二〇年代と一九七〇年代の比較——

箕浦康子

- 一 はじめに
- 二 研究方法
- 三 結果
- 四 考察

論文要旨

個々人は、時代や社会・文化の制約の中で様々な経験を重ねながら、自らの心的世界をつくっていく。近代国家では、学校が期待される行為や能力の基準を明示的あるいは黙示的に子どもに示すことで、子どもの心的世界の形成に深く関わってきた。教科書は、その社会の大人たちが子どもに身につけさせたい規範やものの考え方などの文化的意味を提示しているショーケースとみなすことができる。

本研究では、社会化のモデルとしての教科書登場人物が具現化している意味世界が、カナダと日本で一九二〇年代から一九七〇年代の半世紀間にどのように変わってきたかを調べた。両国で二時点のそれぞれで一番広く使われた小学校四年生の国語教科書を資料として、内容分析を行った。カナダでは、教育はプロヴィンスの所轄とされているので、歴史的に東部カナダとは比較的独立

し、公教育開始年が日本と同じ一八七二年であるブリティッシュコロンビアを比較対象とした。内容分析の結果は、数量化され統計的検定にかけられた。

その結果、次のことがわかった。(1)日本においては、半世紀間に集団主義優位から個人志向と集団志向が伯仲するように変わってきたが、カナダでは集団志向と個人志向の比率は三対七で半世紀を通じて変化がなかった。(2)男性中心志向、成果志向、家族生活の強調はいつの時代、どちらの国でもみられた。(3)両国において半世紀間に、教科書によく登場する人物は、偉人から普通の人に変化した。(4)一九二〇年代には両国とも第一次大戦を題材にした物語がみられたが、一九七〇年代はカナダでは余暇や経済活動から、日本では学校生活から多くの題材がとられるように変化した。